

「小学校における国際理解教育」
～総合的な学習の時間・英語活動・造形教育からのアプローチ～

山口県山口市立平川小学校 辻本 紳一朗

小学校現場における国際理解教育は、総合的な学習の時間の登場と共に、教育課程における位置付けがより明確化されてきたように思う。しかしながら、国際理解教育を単発な国際交流活動としてトピック的に扱うことで、子どもの「学び」が見えにくくなったり、教科学習との関わりを問われたりすることも未だ少なくない。あるいは、一部では、英語活動を実施することで、国際理解教育の実践に替えているというような学校もあると聞く。

そこで、小学校における国際理解教育のあり方について、いくつかの実践をもとに考えてみたい。

I 総合的な学習の時間における国際理解教育

～「地球市民の一員としての実感をもたせる」ために

1 「手をつなごう 私たち地球人」(6年総合95時間の年間テーマ)

～1学期の単元「平和の鐘を響かせよう」の実践を通して

6年生が1学期の総合で取り組んだ単元である。もともとは、広島への修学旅行をメインに、本校においてカリキュラム化されていた平和学習を発展させたものであるが、個人的には、子どもたちが原爆について調べることで戦争について「知ったつもり」になることや、戦争を解決するというおおよそ自分たちの生活とかけ離れた大きなテーマに取り組むこと、また、「平和な世の中とは戦争のない世の中」と短絡的に結びつけて考えてしまうことの危険性について同調できない部分があった。

学校において総合の単元がある意味固定化されるということは、新しくその学年を受け持つ担任の負担軽減や、全校の系統性を考える上では有効なことであるが、新しくその学年を受け持つ教師の願いや子どもの願いや実態、また、社会の要請等を併せ考えると、問題点も少なくない。

そこで、今回は、広島への修学旅行という行事に際して子どもたちがいろいろな調べ学習や聞き取り、また、そのまとめをする活動の中で出会う様々な課題を年間テーマに結びつけることを考えた。つまり、1学期でこの単元を終結させてしまうのではなく、せっきくの追究活動を年間を通じての課題追究の出発点にしたのである。

単元のねらいは、以下の通りである。

- ◎ 自ら見出した課題を友達と協力しながら、参考図書やインターネットを利用したり、被爆者の方の話を聞いたりして、主体的に追求していくことができる。
- ◎ 修学旅行や課題追求活動を通して、戦争の悲惨さと平和の大切さを学び、身近な人々や世界の平和と幸せを願う気持ちや態度を身につける。
- ◎ 平和学習を通して学んだ視点をもとに、自分たちの身近な生活を見直し、自分たちにできることは何かを考えるとともに、実行しようとする。
- ◎ アメリカの人たちとの交流を通して、「平和」についてより広い視野で見つめることができる。

単元の流れをまとめたものが下の表である。なお、ここでの評価の観点を次のように考えた。

【課題を見つける力】：A

【課題を追求する力】：B

【表現する力】：C

【人と関わる力】：D

【生活に生かす力】：E

「平和の鐘を響かせよう」			
5月上旬(2)	○ 戦争に関わる歴史について学ぶ「15年におよぶ戦争」：教科書や資料集をもとに～アウトラインを学ぶ A	社「15年におよぶ戦争」 国「ヒロシマのうた」	課題づくり1 追求1
5月上旬(2)	○ 広島で起こったことについて学ぶ。：資料をもとに。 A・B		
5月中旬(1)	○ ウェビングにより、「平和」についての自分たちの考えを広げながら、追求への視点を明確にしていく。 A		
5月中旬(1)	○ 平和について考え、追求してみたい課題を考える。 A		
5月中旬	○ 各自の課題解決のための活動を行う。 ・ 祖父母への聞き取り ・ 戦時中のものを集める ・ 参考図書で調べる ・ インターネットで調べる ・ 折り鶴作り（全校や地域の人にも呼びかける） B・D		
5月21日 22日	○ 修学旅行に行き、広島で原爆の悲惨さや平和の尊さについて学習する。 (資料館見学・平和公園ウォークラリー) A・B・D	行事：修学旅行	課題づくり2 追求2
26日(1)	○被爆者である漁田さんの話を聞く。 B・D		
(1)	○各自で調べたものを持ち寄り、グループ分けをするとともに、それぞれのグループでの情報交換をもとに、さらなる追求の方法を話し合う。 A		
(3)	○グループごとに課題解決のための活動を行う。 ・ 聞き取り ・ 参考図書で調べる ・ インターネットで調べる B・D		
5月下旬～6月下旬	○ 自分たちで調べたことや、修学旅行で学んだことをもとに、テーマごとのまとめ（新聞）を作る。 C・D		まとめ1

図：「韓国のともだちの絵を

	→中間報告会 →「平和コーナー」に掲示発表	鑑賞しよう」	
7月上旬	○ 「アメリカの先生たちと交流しよう」 交流会について知り、自分たちの課題を持つとともに、 会に向けた準備をする。 A・B		課 題 づ く り 3
7月 13日	○ 「アメリカの先生たちと交流しよう」 異文化への理解を深める。また、平和についてのイン タビューをし、共に考える。 B・C・D		
7月下 旬	○ 単元を通して学んだことをもとに、自分の考えをま とめるとともに、課題追求のための準備をする。 A・D・E		

7月13日には、アメリカの教員視察団の学校訪問と関連づけた交流活動を行った。6年生の子どもたちにとってのアメリカは、やはり人気のある国であり、英語活動で親しんできた国でもあると同時に、原爆を投下した国、でもある。交流活動では、それぞれの課題に応じたグループ分けを行い、準備を進めることとなったが、中でも「アメリカの人たちと一緒に平和について考えてみたい」という思いを持った子どもたちが多かったことが印象的であった。

以下は、この国際交流活動の流れをまとめたものである。

「アメリカの先生たちと交流しよう」

◆ 教育課程における位置づけ

「総合的な学習の時間」 14M (交流会：4M、準備等：10M)

◆ ねらい

- ・ アメリカの人たちとの交流会を通して、アメリカの文化や自国の文化についての理解を深める。
- ・ アメリカの人たちとの考え方の異同について意識しながら交流会を進める中で、国際的な視野を養うとともに、英語によるコミュニケーションに対する興味を高める。
- ・ 「総合的な学習の時間」に設定した自分たちの課題追求活動をインタビューという形で実施することにより、世界の平和と幸せを願う気持ちや態度を身につける。

◆ 評価の観点

【課題を見つける力】 アメリカの人たちとの交流会を通して、新たな課題を見つけることができる。

【課題を追求する力】 自分たちの課題追求のために、主体的にインタビューに取り組むことができる。

【表現する力】 外国から来た人たちに伝わるように、自分の思いをわかりやすく自分の言葉で表現することができた。

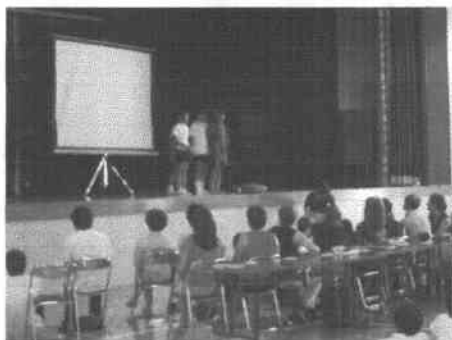
【人と関わる力】 交流会やインタビューを通じてアメリカの人たちと意欲的に関わり、相手の思いを尊重しながら話したり聞いたりすることができる。

◆ 当日までの主な流れ

アメリカ教員団の学校訪問について知る。	
アメリカ合衆国やバーモント州・NYについて簡単な情報を得る。 1M	
交流会を開くことを計画し、それに向けた自分たちの課題を持つ。 2M	
交流会に向けた準備を進める。 6M A 日本文化の紹介チーム（調べ学習や事前準備・練習など） B 「アメリカの人たちへの質問チーム」 （アメリカについての調べ学習と質問の準備） C 「平和」についての質問チーム （自分たちの課題に沿った質問を考える。） D 英会話に挑戦チーム（調べ学習・事前準備・練習） ※ 司会や日本文化の紹介なども児童が行うよう支援する。	
アメリカの人たちとの交流会をもつ。（7月13日） 4M	
交流会を通して学んだことをまとめ、次の課題作りのきっかけとする。 1M	

【活動の様子】





平和についてのインタビューをした子どもたちは、ストレートに「広島にある原爆ドームに行かれて、どんなふうに感じましたか。」と尋ねていた。それに対し、アメリカの先生たちは、「とても悲しいと思った。」と話された。また、ひめゆりの塔について知らないという先生たちに、自分たちがまとめた学習の成果を発表する子どもたちもいた。「世界から争いをなくすために何をしたらいいと思いますか。」という子どもたちの質問には、アメリカのある先生が「世界中の人々が仲良くなれるような取組みを続けていくことが大切だと思う。そういう意味で、今日のような国際的な交流会を開くことはとても有意義だと思う。」と話された。

会の最後に、あるグループが「日本人は今、平和な世の中になるよう努力していますが、アメリカでは平和になるようにどんな活動をしていますか。」という質問をした。それには、「戦争反対という意志を強く持つようにしている。そして、平和な世界になるように、9月に行われる大統領選挙では、戦争のない平和な世界を築くことのできる候補者を選ぶようにしないといけないと考えている。」と答えられた。

いずれにしても、子どもたちの真剣な態度にアメリカの先生たちも大変感銘を受けていたようだった。一つ日本の子どもたちが真摯な態度で平和について考えていることに感動された先生もいたようだ。

(子どもたちの感想から)

- ☆ 交流会で、日本の文化を伝えられてよかったと思いました。アメリカの人に自己紹介を英語でできたこともうれしかったです。昔、日本とアメリカは戦争をしていたけれど、今は仲良くこういう交流会ができるのですばらしいと思います。
 - ☆ アメリカの先生たちは、やさしくてみんなととてもなかよくしていたので、「アメリカの人はこわい人たち」と思っていた気持ちが変わりました。アメリカの人たちとやったゲームはとても楽しかったです。またみんなとやってみたいです。
 - ☆ ほかのグループがインタビューしていたとき、アメリカの人たちが「戦争には反対です」と言ってくれたので、とてもうれしかったです。またいつか今日みたいな交流会をしてみたいと思いました。
 - ☆ アメリカの先生方は、広島の前爆のことを聞いたとき、心をいためていたように私は感じました。先生の一人が「日本は平和のことについて深く考えていらっしゃいますね。アメリカの人も見習いたいです。」とおっしゃっていました。この言葉が心に残りました。
- 給食時には、給食当番が仕事をしているところをカメラで撮られていました。とてもめずらしいと思ったのでしょうか。それと、上ぐつにもおどろいていたようでした。毎日当たり前にしていることでも、国によって違うんだなあ、と思いました。

■ 実践をふりかえって

今回の活動で時に配慮を要したのは、インターネットによる調べ学習である。特に戦争についての記述は、情報の作成者の思いや考え方で大きく左右される。記述も小学生には難しいものが多かった。教師がしっかり関わる必要がある。

また、安易にインターネットに頼る子どもたちには、何を調べたいかを具体的なレベルまで検討させることが大切である。そうする中で、検索するキーワードを吟味することができてくるだろうし、それを調べるためにどのような方法が最適あるかを再検討することも可能となる。

また、それぞれの子どもたちが様々な場所で様々な活動を行うこうした学習では、個々の子どもたちの姿を見取ることが難しくなってくる。そのため、今回は、その時間における評価の観点を具体的な子どもの姿にまで下ろしたものを記した学習カルテを活用した。また、場合によっては、子どもの学びの流れやその中でのつまづきなどを発言やポートフォリオ、感想、まとめた資料などから読み取り、ピンポイントで関わっていく必要性もある。

いずれにしても、評価は子どもに返すためにある。(支援へとつながるべきものである。)

また、教科との関連づけを重視するあまり、不自然な単元の入替え作業を行ったり、本来の単元目標を変えてしまう必要も生じることがないように配慮したい。

さらには、学習活動を進める上で必要となるスキルとしてどのような学びが必要であるかを吟味し、教科・領域との関わりを考慮しながらカリキュラムを組み立てていくことが今後の課題となろう。(書く力・読む力・PCスキル・調べ方・描く力・まとめる力・基礎的な資料収集能力等)

今回は、保護者に子どもたちの学びの姿を伝えていくことにも配慮した。総合における学びについて理解してもらい、同時進行で子どもを見つめていくことが大切であると考えている。

さて、この単元における課題追究の入り口は「平和」というテーマであった。広島への修学旅行は、平和というものについて子どもたちが真っ正面から考えたり、課題意識を広げたりするよいきっかけとなった。しかし、それは同時にそこから国際理解・環境・郷土へと広がっていく可能性をもつものである。

平和についての追究活動の中で、子どもたちの目は確実に世界へと向けられ始めた。また、子どもたちの中から「戦争がなくなりさえすれば、本当に平和が訪れるのだろうか」という疑問が出された。調べ学習の時に会った食糧問題についての本がきっかけだったようだ。

そこで、2学期の単元名を「手をつなごう 私たち世界の子ども」※とし、社会科の「世界の中の日本」とのクロスカリキュラムや、開発教育の視点で、「平和」についてより広い視点で考えていくことになった。海外青年協力隊OBやNGO関係者を招き、話を聞いたり、ワークショップに参加する中で、世界で起こっている不条理について考え、自分たちの生活を改めて見つめ直すような場を持つことができれば、とも考えている。(※添付資料参照)

こうした活動の中で、ユニセフ等の国際機関の平和への努力や国と国との国際協力の現状を知るとともに、平和は地球上のすべての人々の願いであるということや、地球に住む同じ人間として助け合い協力することが大切であるということにも気づかせたい。

そしてまた、3学期に向けて、6年生の子どもたちが「地球人としてできること」について考え、できることから実行するような活動になれば、と願っている。

つまり、21世紀を生きる子どもたちには、地球規模で考える視点を持ち、自分たちの当たり前を見直し、自分たちの生き方を見つめなおし、さらには地球市民として足元から実行していくといったことを期待するものである。

■ 地球市民として考える、ということについて

子どもたちに、自分たちの身の回りのものについて気をつけて見せると、衣食住すべてにおいて、自分の生活が諸外国とのつながりの中で成り立っていることに気づくであろう。自分の衣服がアジアの国々からやってきたものであったり、おやつのパテトチップスがアメリカ製だったり、台所用の洗剤がベルギー製だったり、おでん用のすじ肉がオーストラリアの牛だったり……。こうした発見が子どもたちの外国への興味をかきたて、また、自分たちの生活を見つめなおすきっかけにもなると考える。

数年前に、5年生の社会で、「ロブスターの旅」という授業をした。山口市のスーパーで売られているロブスターや、近くの結婚式場の広告に載っているロブスターが、西オーストラリア州のパースから送られてきている、ということに目をつけ、ロブスターがどこからやってきたのか、を時間を逆もどりしながら追究していく授業である。西オーストラリア州北部のランセリンという港町で獲られたロブスターがパース空港から運ばれてきていることを調べる中で、「食べられればそれでいい」、と考える現地の人たちと、「生きたまま、ひげも足も折れていない色のきれいなロブスターを食べたい」という日本人との考え方の違いに苦労する商社の人たちのことや、そうしたロブスターを日本まで運ぶために様々な人々がいろいろな工夫をしていることが分かり、大変興味深い授業となった。また、日本と同じようなかまぼこがオーストラリアでも売られていることや、それには、オーストラリアの人々の好みの味がつけられている、ということを知る中で、いろいろなものの考え方の違いはあっても、どちらが正しいというのではなく、それらを違いとして認めていくことの大切さについても考えるきっかけができたように思う。あわせて、ロブスターの捕獲に厳しいきまりを作り、海洋資源の確保に努めるオーストラリアのような国がある一方で、乱獲をしながら、その日その日の暮らしを成り立たせている国があることなど、様々な問題にも気づくことができた。

私たちの生活は、多くの国々とのつながりを持ちながら成り立っている。同時に、その中における問題にも目を向けさせることが大切である。たとえば、環境問題は、現代人が未来人に対しての加害者になったり、先進国の人間が開発途上国の加害者になったりするものであり、時間や空間を超えた地球人としての問題がそこに見えてくる。

これは、食料問題についても同様である。牛を1キロ太らせるために必要なトウモロコシで、飢えに苦しむ人たちの命をどれだけ救えるか、ということから授業を展開させることもできる。

とは言え、小学生である子どもたちが、問題を解決することは当然困難である。「地球規模で考えながら、今の自分にできることを足もとから実行できる」ことが大切である。たとえば、つけっぱなしの電気を消そうとすることから始めてもよいのである。国際理解教育において大事なことは、こういった問題について「気づかせ、継続的に考えさせる」ことであると考える。

2 「手をつなごう 私たち地球人」(6年総合95時間の年間テーマ)

～2学期の単元「手をつなごう 私たち地球の子ども」の実践より

① 「世界が39人の村だったら…」(6年道徳・総合)

「世界がもし100人の村だったら」という本をベースに、ワークショップ形式で組み立てた授業である。まず、現在の人口63億人が50年前にどうだったか、また、50年後にはどうなるかを三択問題を通して考えた。それぞれの答えが25億人と93億人であることに、子どもたちも大変驚いていた。

次に、世界の人口約63億人をクラスの人数39人に見立てた場合、男性と女性の割合がどのようになるか、また、世界の中での老人の割合と日本の中での老人の割合をそれぞれ女子・男子の中における割合に置き換えるとどうなるか、という活動を通し、そこにどんな問題が生じるかをみんなで考えた。

また、アジア・アフリカ・ヨーロッパ・北アメリカ・南アメリカ・オセアニアのグループごとに人口比に基づいて分かれてもらい、それぞれの大陸の面積比の√の比率から算出した長さのロープの中に入ってもらった。アジアグループでは、25人もの子が1つのロープの中でぎゅうぎゅう詰めになったが、それに比べて、その他の地域が広々としていること、開発途上国を多く含むアジア・アフリカの人口密度が極端に高いことなどを体感しながら、そこに生ずる問題について考えた。

(授業後の感想より)

- 世界の人口が100人だったら、とたとえると、大きな数で考えるよりもとてもわかりやすく勉強することができました。わたしは、アジアグループでしたが、ロープがとても短いなあ、と思いました。アジアの人たちは、せまいところに住んでいるんだなあ、と思いました。
- 自分たちがどんなに幸せなのかがよくわかりました。世界の人口が50年間に25億人から63億人に増えたことにもびっくりしました。同じ地球に生まれた同じ人間なのだから、人間は公平でないといけないと思います。
- この授業で分かったことは、世界には食べ物も食べられない人がいるのに、食べ物を残したりするぼくたちは、すごくぜいたくだということです。
- 世界の人口がアジアとアフリカの人なんだなあ、と思いました。この授業でぼくの知らなかったことがかなり分かりました。楽しかったです。
- アジアとかアフリカが世界の人口の50%もしめているとは知らなかった。生きていることがすごくありがたいということを改めて思った。

② 「室町文化祭」(6年社会・総合)

社会科の発展学習である。今もわたしたちの生活に受けつがれている室町文化について調べ、茶の湯・生け花・水墨画などを実際に体験する活動を通して、今もなお多くの人々に親しまれている室町文化の歴史的意義について関心を持つことをねらいにしたものである。会に先立って、子どもたちは1学期に学んだ室



町文化について再度調べ学習を行った。そして、その中で自分が興味を持った文化を実際に体験してみる活動を仕組むに至った。今回は、「茶の湯」「生け花」「水墨画」を体験することになり、計8名の地域の先生方を学校にお迎えして行った。

それぞれの子どもたちが楽しみながら、今に生きる室町文化を体験し、日本の文化について、様々なことを学ぶことができたようである。

③ 「フォトランゲージで世界を知ろう」(6年総合)

いろいろな国の写真を使った授業を行った。それぞれのグループにその国の特徴を表す写真を配り、その写真から感じた印象や意味を話し合ってもらうものである。フォトランゲージとよばれる手法である。今回は、意見を出しやすくするために、それらを新聞記事にする、という方法をとってみた。活動のあとで、1枚ずつ写真を提示しながら、子どもたちの記事の紹介と写真の解説を行った。いろいろな国の意外な生活に子どもたちも驚いていたようだ。



子どもたちは、楽しみながら、いろいろな国についての関心を高めることができたようだ。また、同じ地球に住む人々の様々な生活について興味を持った子どもたちも多かったようである。子どもたちの興味・関心は、その後の課題に結びついていった。

【授業後の感想から】

- いろいろな国のことを知ることができてうれしかったです。私はあまりいろいろな国のことを知らないの、これをきっかけにいろいろな国のことをもっともっと調べようと思います。地図をぱっと見て、調べたい国がわかるようにもなりたいです。
- いろいろな国の様子が分かってよかったです。地雷がうまっている国もたくさんあることを知って、改めて地雷は怖いものなのということがわかりました。私が知らないことや初めて見たところなどが見られて、すごく良かったです。
- 写真を見てどこの国かを考えたり、どんなことをしているかなど、日頃考えないことを考えることができました。国を形だけであてたりするのも難しかったけど、できました。
- 思ったよりも難しかったです。写真は1枚でも、みんな違う考えだったので、おもしろいなあ、と思いました。国が違うだけだけど、こんなに環境が違うとは思わなかったです。
- 写真を見てどこの国かを考えたり、何をしているのかとか、どういうところなのかを考えたりするのがとても楽しかったです。いろんな国の問題や町の様子など、いろんなことがわかってとても楽しかったです。またやってみたいと思いました。
- この活動を体験して、いろいろな国の特徴や行事、乗り物や商売などいろいろなことが分かりました。まだまだいろいろな国があるので、もっともっと調べたいです。フォトランゲージはとても楽しくいい勉強になりました。
- いろいろな国ことがよく分かりました。他の国の行事がよく分かりました。またやってみたいと思いました。今度は自分で進んで調べてみたいです。
- 各国の写真を見て思ったことは、1つの国の写真をいろいろな方向で見ると、いっぱい想像できることです。写真を見て何かを考える、感じる、想像するということが学べた気がします。とても楽しかったです。

④ 「もし、あなたがアボリジニだったら…」(6年道徳・総合)

「アボリジニのものの見方で考える」という授業を行った。アボリジニアートの鑑賞を発展させた学習である。

イギリス人たちにとって、大変な航海の末、やっとたどり着いたオーストラリアは、新たな希望を見出せる新天地であった。彼らは、砂漠や森を開拓し、血のにじむような苦勞をして少しずつ町を作り上げていった。その社会のルールをたやすく破ってしまったアボリジニたちは、当然、イギリス人たちにとって、喜ばしくない先住者であったろう。

当時の社会背景は現在と大きく異なり、イギリス人たちのとった非常措置も理解できないことではない。ただし、大切なのは、双方の視点での考察である。そこで、今回はアボリジニの視点で考えるという活動を仕組むことにした。

移住者たちの「当たり前」とアボリジニたちの世界での「当たり前」が違ふことによって生じた数々の衝突。そして、それは移住者たちのものの見方・考え方の押しつけにより、アボリジニたちの迫害へとつながっていった。

そういった経緯を理解した上で、「もし自分がアボリジニだったら、どんなことを考えたか」を話し合わせた。

その後、今の自分たちの生活は、白人側とアボリジニのどちらに近いだろうか、と問い掛けてみた。難しい問題ではあったが、「豊かな共生社会を目指すために、自分たちができることは何か」について考えるきっかけになったと思う。

(授業後の感想より)

- もともと私たちが住んでいたところにやってきて、私たちを差別するなんて悲しいことだな。
- いきなりこの土地をのっとられた気持ちをわかってほしい。
- 白人たちは私たちにとっては、やばんで、私たちの考えていることを理解してくれない。なんで平等にできないのかわからない。
- この土地はだれのものでもないはずだ。～アボリジニが土地を共有するという考え方から～
- この人たちが来たおかげでふつうの生活ができなくなった。簡単に人を殺したり、自然を破壊したりするのはなぜだろう。仲良くしようよ。もう殺し合いはやめようよ。
- なぜみんな一緒に住んではいけないんだろう。どうして自分第一の生活をするんだろう。私たちは変なことをしているわけではないのに。
- 自分たちのことを理解してほしいのなら、アボリジニのことも理解してほしい。みんなが平等に暮らしたい。私たちのことをわかってくれるのなら、一緒に暮らしたい。

⑤ 「難民」(6年道徳・総合)

授業の最初に、難民についてのイメージを自由に出してもらった。

(生活が苦しい民族・貧しい人たち・差別されてる人たち・国から追い出された人・働けない人・住むところのない人・苦しんでいる人たち・危険な人たち・見知らぬ人たち・不自由な人たち・苦勞して生きている人たち・ふつうの暮らしができない人たち・戦争などが起こっている所で暮らしている人たち・ほかの国から来て差別されている人たち・路上で暮らす人たち・アフリカやイランやイラクの人たち・あやしい人たち・こわそうな人たち…)

その後、世界にいる難民の数やその中における女性と子どもの割合（約8割）について考えた。また、「難民」の写真パネルを見ながら、気づいたことを話し合った。

その後、普通の家族が難民になっていく、ということを擬似体験する活動をした。



子どもたちがグループごとに家族になり、平和な国に住んでいる、という設定である。その平和な国で戦争が勃発。家族は自分たちの命を守るため、カバン1つに財産をつめて逃げることを決心する。カバンの中につめるものは15品目。子どもたちは話し合いながら何を持ち出すかを決めた。長い間歩いて、港にたどり着き、船で脱出を図る。しかし、定員オーバーのため、荷物の半分近くを捨てなくては行けない。話し合いながら、残す荷物を決めた。

船で10日以上も揺られ、やっとある国にたどり着く。

そこで国境警備隊にパスポートの提示を求められる。ここでパスポートがない家族は、苦労して出てきた国に連れ戻されることになる。

やっと安全な国に入ることができても、みんなの住める難民キャンプまでは、また長い距離を歩くことになる。途中で家族の1人が病気になり、持ってきた薬や病院代としてのお金を使い果たしてしまう。そうして「安全な」難民キャンプにたどり着くが、その家族に残されたものは、わずかな荷物だけである。いつ自分たちの国が安全な状態になり、そこへ帰ることができるかは分からない。

子どもたちは、活動を通して、難民とは、授業の最初に自分たちがイメージしたような「特別な人たち」であったわけではなく、もともとは、ごく普通の生活をしてきた人々であり、社会の混乱から、こうした不条理な状態へと押しやられ、当たり前生きる人権をも迫害された人々なのだという活動を活動の中で感じ取っていたようだ。



授業の終わりに、南スーダンから逃げたヤコブという少年の作文を読んだ。世界中に存在する、子どもたちをも巻き込む不条理について、子どもたちなりの課題意識を持つきっかけになれば幸せである。

⑥ 「5歳の誕生日をおぼえていますか？」（6年道徳・総合）

5歳の誕生日。6年生の子どもたちは、みんなそれを経験してきた。しかし、世界には、5歳の誕生日を迎えることのできない子どもたちが、1000人のうち200人以上もいる国が多くある。そうして、世界では、1年間に1100万人の子どもたちが5歳になる前に命を失っている。これは、3秒に1人、という割合である。

授業では、資料をもとに、白地図に1000人生まれたうち200人以上の子どもたちが命を失う国、150人以上が命を失う国に色塗りをしてみた。そうすると、世界中の非常に多くの国が赤に染まってしう。子どもたちは、そのほとんどがアフリカを中心とする開発途上国であることに気づく。そして、そうした子どもが命を失う理由を考えた。

実は、主な理由としては、肺炎・下痢・はしか・マラリアなどが大半を占める。子どもたちから意見が出されたように、日本では当たり前に入るような薬や予防接種、そして、医師、病院、などの不足がその主な理由である。

ここでも、子どもたちは「自分たちの当たり前が世界の当たり前でない」ことをふり返ることができたように思う。

【授業後の感想より】

- ◇ わたしは、とてもかわいそうだと思った。神様には世界を平等に作ってほしかった。そうしたら、5歳までに子どもたちが死んでしまう国もなくなり、戦争もなく、みんな仲良くできると思う。もし、5歳までに多くの子どもが死んでしまう国に行けたら、薬や食料をあげて、少しでも役に立ちたいと思う。
- ◇ 5歳までに死んでしまう人の数が、世界ではすごい差があることにビックリしました。今、まさに人が死んでいることを知って、ぼくは助けてあげたくなりました。日本は、そういった国よりも幸せだと思いました。他の国に幸せを分けてあげたいと思いました。
- ◇ 薬もなく、治りようもしてもらえなかった子どもたちが世界にはこんなにたくさんいることが分かりました。そんな子どもたちのために、薬などをあげている人たちがたくさん増えればいいなあ、と思いました。私たちは、まだ子どもだけど、そんな世界の子どもたちを助けてあげたいと思います。
- ◇ 3秒に1人の小さな子どもが死んでいるなんて、すごくかわいそう。治りようするところがあつたら、そんなにたくさん子どもたちは死なないのに。本当に悲しい現実だと思いました。1年間に死亡する子どもたちの数が1100万人なんて聞くと、ぞっとします。ぼくたちがボランティアなどで病院を建てたりしたら、多くの人たちが助かるから、自分にできることがあつたら、いっぱいしたいと思いました。
- ◇ いろいろな病気で死んでいたり、薬がなくなって死んでしまう子どもたちは、かわいそうだと思いました。戦争などの武器にお金を使うくらいなら、そのお金で薬を買えばいいのに、と思いました。
- ◇ わたしたちは、何不自由なく暮らせているのに、いろいろなものが足りない国もたくさんあるということを知って、「日本などの国では、食べ物なども作るだけ作って、残すだけ残すけど、そんなあまり物でさえ貴重な国の人たちがこういうことを見たら、どう思うだろう。」と思いました。

Ⅱ 英語活動「ワールドタイム」と総合的な学習の時間

本校では、3年生以上各学年において年間15単位時間の英語活動「ワールドタイム」を実施している。アメリカ人ALTとオーストラリア人留学生を迎えての授業とJTEを迎えての授業をいずれもチームティーチングの形で実施している。特にJTEとの授業では、今年度から、「小学校英語における学びのあり方」について「フォノビジュアル」という手法を用いて研究を進めている。

前述のように、学校現場では、英語活動を即ち国際理解教育のようにとらえることが少なくない。これは、国際理解教育というものへの理解不足と同様に、英語というものに対する教師の研修不足が影響しているように思えてならない。

私が英語活動において特に大切に考えていることは、「ことばの大切さに気づかせること」、「五感を使って相手の思いを理解する力を育てること」、「英語を通して世界を見つめ、自分と世界とのつながりを実感させること」である。

さて、そんな中で、「英語活動をなぜ総合的な時間の中で行うのかわからない」あるいは「総合的な学習と英語がどうしても結びつかない」といった意見も多く聞かれる。そこで、総合と英語について自分なりにまとめてみたい。

① 学習指導要領における「英語活動」

「総合的な学習の時間」の中で「**国際理解に関する学習の一環としての外国語会話等**を行うときには、学校の実態等に応じ、児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど小学校段階にふさわしい体験的な学習ができるようにすること。」とある。これが総合の中で英語を行う第一の裏付けとなろう。

しかしながら、ここで扱うのは、「英語」ではなく、あくまでも「外国語会話等」である。各学校の実情、児童の実態等に即し、英語以外の外国語を扱うことは十分に考えられることである。

また、総合的な学習の時間のねらいは、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること、また、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること、である。総合的な学習のねらいに即して言えば、児童が、「英語を通して」これらのねらいを達成することが必要となろう。

② 総合と英語活動の構造的なかわり

総合的な学習の時間の活動内容の中の国際理解



国際理解の学習の一環としての英語活動

③ 内容から見た「総合としての英語活動」

- 体験的な活動
- 社会の要請（国際化）からの視点
→国際理解教育の中で要請される英語
- 児童が自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、問題を解決していくような場づくり
→児童が立ち止まり、考え、判断しながら進める活動に。
- 学び方やものの考え方を身につける活動
→英語というものを通して学び方を身につける。たとえば、「聞く」「話す」「相互理解を図る」中でコミュニケーションの方法を知り、その楽しさを学ぶ。
- 総合的な学習の時間の課題づくりへとつなげていく場づくり
→英語をきっかけにした「学び」を大切にしていく。

Ⅲ 造形教育における国際理解

■ 自分らしさを培う

物質的な豊かさを追い求めてきた日本が、今後求められるものの一つは、精神的な豊かさの追求であろう。同時に、日本人が本来持ち合わせてきている高い芸術性や文化レベルといったものを、再度、見つめ直すべきではないだろうか。

日本の文化とはどこから生まれ、どのようにして培われてきたものなのか。つきつめれば、自分はいったいどのような人間であるか、自己との対話において、考えてみるのが大切であろう。

造形活動は、ものづくりや作品の鑑賞を通して、新たな自己と出会い、さらなる自分らしさを培っていく活動である。また、様々な作品と出会うことによって、それまでの経験で得た知識や感情をさらに強化したり、再構成したりしていくこととなる。

造形教育においては、子どもたちに多様なものの見方、考え方、感じ方といったものを経験を通して身につけさせると同時に、作品づくりを通して、そのよさを追求する中で、自己と対話し、「自分らしさ」というものを見つけ、それをよりよく表現する力を育てていきたい。こ

の繰り返しが、子どもたちにとって、豊かな生き方への基礎になるのではないかと考える。

■ コミュニケーション能力の育成

自分らしさを身に付け、それを伝えるための手段としての造形教育の役割は大きい。造形表現によるコミュニケーションは、言語を介さず、視覚を通して直接相手の感性に働きかけるインパクトの強いものであると同時に、手や体全体を使って表現することで、より一層「その子らしさ」が伝わるものである。

鑑賞活動においては、自分の感覚を働かせ、よさや美しさを感じ取る中で、子どもたちは豊かな感性を見につけていくこととともに、「自分らしい」見方や感じ方を培っていく。さらに、第三者の作品の中に「その子らしさ」を見つけることで、相互理解が深まっていくものと考えられる。

■ 自国や他国の文化の尊重

素晴らしい造形作品との出会いは、子どもたちの感性を豊かにするのみならず、子どもたちの造形感覚を大いに刺激する。子どもたちは作品と出会い、第一印象からその作品に対する自分なりの評価をすることになる。この一時的な感情こそがその作品をより深く見つめるための第一歩であり、大切にされるべき感性の育ちであろう。これは、それまでに子どもたちが経験した美的な感覚や創造的な経験などによって成されるものであり、自分自身の感覚や感情をそのまま作品にぶつけた形の評価になる。

教師の働きかけや、鑑賞活動の繰り返しにより、一時的な感情は、次第に作品をより深く鑑賞しようという態度に変わっていく。ここでは、作品の背景にある文化や時代、作者の個性といったものにもぜひ目を向けさせたい。一つの作品は、そういったバックグラウンドをもってつくられるからである。

そうした中で、子どもたちは多様な造形表現を広く受けとめ、それを尊重する態度を身に付けていく。つまり、さまざまに異なるものを尊重する態度が育成されるのである。

このことが、それぞれのよさや美しさを再発見したり、作品を通して様々な人の思いや、異なる国の文化を大切にしようとする態度の育成へとつながっていくものと考えられる。

【実践事例：1】

「名前をアートしよう」

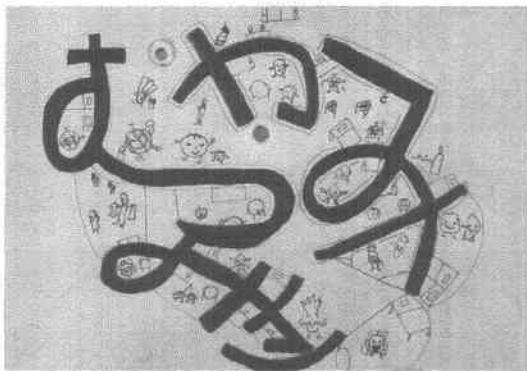
◇ ねらい

- ・ 自分の名前を生かして、動きのある線を思いのままに描くことができる。
- ・ 線の重なりやリズムから発想し、自分なりの世界を楽しみながら広げていくことができる。
- ・ 自分の作品や友だちの作品のよさに気づくことができる。

◇ 教材化にあたって

- ・ 平仮名は子どもにとってなじみのある文字です。日本固有のこの文字をながめてみると実になめらかで素晴らしくデザイン化されたものであることに気づく。
- ・ 子どもたちに人気のあるアイドルのサインの中にも、このひらがなの流れのある形を生かしたものが多く見受けられる。このあたりから授業に切り込みを入れると、子どもたちの興味をぐっと引き寄せることができる。
- ・ 自分の名前をデザイン化するという活動を通して、子どもたちが自分の「名前」にもこだわりを持ってくれたら、日本固有の「ひらがな」という素晴らしい文字文化を尊重することができたら・・・という願いも持ってこの題材を設定した。

◇ 子どもたちの作品から



【実践事例：2】

「パブリックアートを鑑賞しよう」

◇ ねらい

- ・ アメリカのパブリック・アートを鑑賞する活動を通して、それらのよさや意義について考えるとともに、暮らしの中にある身近な美術作品に関心を持つ。

◇ 教材化にあたって

アメリカの町を歩いていると、美術的関心を喚起させるような様々な美術作品に出会う。それらの中には、街の美観を意識したものや、バリアフリーに見られるように様々な工夫された機能的なデザイン、環境との調和を考えた造形作品などがある。そういった作品たちが、街と一体となって都市空間に潤いをもたらしたり、人間らしさをもたらしたりしながら、人々の心を豊かにしている。それらは、時代の精神や価値観、美意識といったものを映し出す鏡でもある。先進であるアメリカのパブリック・アートを鑑賞することで、子どもたちの興味・関心を引き出すとともに、自分たちの身の回りにある美術作品を改めて見つめ直すきっかけになれば、と考えた。また、美術作品を「人が作りだしたもの」という大きな枠でとらえることによって、子どもたちに、その奥にある「人」について興味を抱かせることも大切であろう。

◇ 教材としての素材例



水飲み機
(ロサンゼルス)



ビルの壁画
(サクラメント)



街角のオブジェ
(サクラメント)

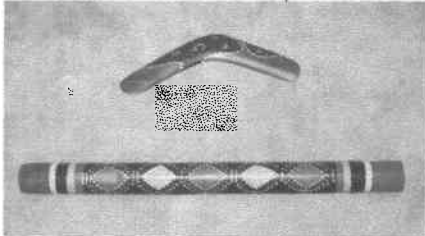
【実践事例：3】

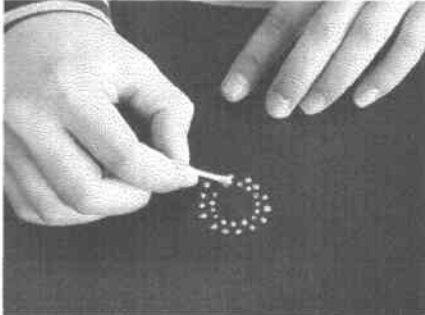
「アボリジニアートで表すわたしの思い」

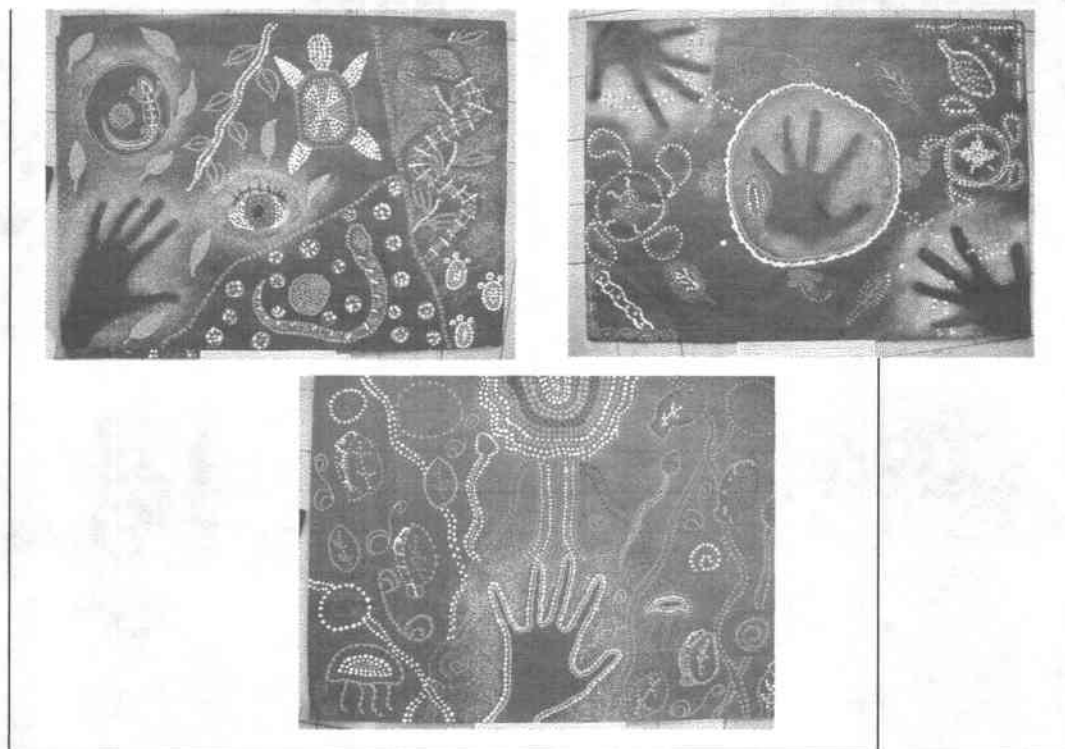
◇ ねらい

- オーストラリアという国の歴史や風土の特徴にふれ、かつ、オーストラリア先住民の芸術の美しさや特性を体感することにより、それらに親しみ、関心をもつことができる。
- 今まで体験したことのない表現方法で、形と色で伝えたいことを伝え合うことにより、「つくり出す喜び」を味わうことができる。
- アクリル系絵の具などの材料や表現方法の特質を生かして、デザインの能力や創造表現の能力を高めることができる。

◇ 活動の流れ

学習活動・内容 「子どもの思い」	使用教材
第1次：アボリジニについて知る。（1時間） - オーストラリアについて知っていることを話し合う。 - アジアの南に白人社会があることの不自然さを地図をもとに指摘。 - オーストラリアが移民国家であることに気づかせる。 - アボリジニの歴史や文化について説明する。 - オーストラリアの先住民、崇高な文化、独特の宇宙観（ドリーミング）による豊かなものの考え方、アボリジニ・アート	世界地図、オーストラリア写真集、アボリジニ写真集
第2次：アボリジニ・アートを鑑賞する。（1時間） - アボリジニ・アートを見て感じたことを自由に話し合う。（予想される児童の感想） - オーストラリアの動植物が登場する。鮮やかな色彩で描かれている。絵に上下がない。（基底線がない）点の集まりで描かれている。お話があるようだ。手形がよく登場する。スパッタリングで表現したものもある。色づかいがすばらしい。不思議な絵 - アボリジニ・アートでデザインされたブーメランや民族楽器であるディジュリドゥなどを鑑賞し、彼らの文化に対する理解を深める。（よさや美しさに気づかせる。）	アボリジニアートコレクション、ブーメラン、ディジュリドゥ、クラップスティック 
第3次：イメージ・ノートに表現する。（1時間） - 自分のイメージをランダムにノートに描きながら、それを言葉に直す。 - その中で見えてきたテーマをイメージ・ノートに表現する。画面の構成も考えるため、ノートをひっくり返したり、床の上に置いて眺めてみたりする。	イメージ・ノート

3 イメージを広げるため、必要であれば、オーストラリアの動植物やオーストラリアの自然について調べる。	
第4次：アボリジニ・アートで自分の思いを表現する。（4時間） （アボリジニ・アートの大きな特徴であるドットでの表現を取り入れ、自分の思いを表現。） 1 マッチ棒の先にアクリル絵の具をつけ、黒画用紙上にドットで表現していく。  2 試しがきをしながら、自分の思いに合う色の用紙を自由に選び、原色のアクリル絵の具をマッチ棒の先につけてドットを打つように表現していく。 * アクリル絵の具は、水溶性であるため扱いが容易。色が乾いた後に、その上に別の色を重ねて描くこともできる。光沢があり、立体感のある重厚な表現もできるという特徴をもつ。   3 自分の世界観を表すために、いろいろな表現方法を取り入れていく。 * スパッターリングによって対象を浮かび上がらせる。 * 手型により「自分」を表現する。 * 鑑賞したアボリジニ・アートのように、オーストラリアの動植物をレントゲン技法で表してみる。 （ディジュリドウを使った音楽をBGMとして使用。崇高な雰囲気作りに努める。）	アクリル絵の具、マッチ棒、黒画用紙 アボリジニの民族楽器のCD
第5次：アボリジニ・アートの鑑賞会（1時間） 1 パネルにそれぞれの作品を貼って鑑賞しあう。 2 それぞれの作品のよさや特徴について自由に話し合う。 3 それぞれの子どもたちが自分の作品についての思いを語る。（自分のこだわりや自分らしさに気づかせる。）	提示用パネル



(授業案より)

教科等	図画工作科	場所	6年2組	指導者	辻本 紳一郎
題材名	アボリジニアートで伝えるわたしの思い			本時	4 / 6
主眼	○ オーストラリアという国の歴史や風土の特徴にふれ、かつ、オーストラリア先住民の芸術の美しさや特性を体感することにより、それらに親しみ、関心をもつことができるようにする。 ○ 今まで体験したことのない表現方法で、形と色で伝えたいことを伝え合うことにより、「つくり出す喜び」を味わうことができるようにする。 ○ アクリル系絵の具などの材料や表現方法の特質を生かして、デザインの能力や創造表現の能力を高めることができるようにする。				
主な学習活動・内容			○教師のはたらきかけ【評】		
1 アボリジニアートの表現の特徴について想起する。			○ 児童の思いを広げるための支援として、前時に用いたアボリジニアートを提示する。 ○ アボリジニアートの大きな特徴であるドットでの表現について想起させる。		
アボリジニアートで自分の思いを表現しよう					
2 マッチ棒の先にアクリル絵の具をつけ、黒画用紙上にドットでの表現をする。			○ 試しがきをしながら、自分の思いに合う色の用紙を自由に選ばせる。		

3 自分の世界観を表すために、いろいろな表現方法を取り入れていく。 - 対象を浮かび上がらせるためのスパッタリング - 手型による「自分」の表現 - 鑑賞したアボリジニ・アートのように、オーストラリアの動植物をレントゲン技法で表現 4 パネルにそれぞれの作品を貼って鑑賞しあう。(中間鑑賞会) - それぞれの作品のよさや特徴についての自由な話し合い	○ 原色のアクリル絵の具をマッチ棒の先につけてドットを打つように表現することを伝える。 【発想・構想】自分のイメージをどのように表現するか想を練っているか。 ○ 児童一人一人が、自分の発想を思いのままに広げ、膨らませ、材料を扱い、操作しながら自分の思いを表現できるよう、支援する。 ○ ディジュリドゥを使った音楽をBGMとして使用し、雰囲気作りに努める。 【創技】アボリジニアートのよさや特徴を生かし、自分の思いが伝わるような表現をしているか。 ○ それぞれのこだわりや表現の特徴に気づかせる。 【鑑賞】作品の特徴に着目した発言や感想が見られたか。
指導の工夫改善	○ 児童一人一人に明確なめあて意識を持たせる。 ○ 今まで体験したことのない表現方法を用いることにより、どの児童もが自信をもって「つくり出す喜び」を味わうことができるようにする。 ○ 児童が成就感を持てるような鑑賞の場を工夫する。 ○ 児童一人一人の変容を質的に評価するための評価カードを工夫する。 ○ 児童の進歩の状況に目を向けた評価に努める。

【実践事例：4】

「韓国の友だちの絵を鑑賞しよう」(鑑賞：4M)

◇ 活動の流れ

時間	子どもの活動の流れ	教師の役割
2分	○学習内容を理解する。	○チャオウン・ウンナン小学校の6年生児童の作品を教室前に提示する。子どもたちが後で自由に鑑賞できるよう、可動式パネルを用意する。 ○作品について、自由に話し合うよう提案する。 「どんな印象？」 「どこの国の絵かな？」 ○表現内容について、よく見るように様子を見ながら言葉がけをする。 ○子どもたちの活動を観察しながら、造形的要素やモチーフなど発話を分析しながら適宜支援
3分	○グループで作品について話し合う。 ・ どの国の絵かな？ ・ 変わった絵があるよ。 ・ 服装やまわりの様子が日本と違うね。 ・ 僕たちが使わないような表現方法で表されているね。 ・ すごく上手だよ。 ・ 色がきれいだね。	
25分	○韓国の子どもたちの作品を自由に鑑	

	賞する。 ・グループでの気づきをもとに、自分の好きな作品を選び、自分が感じたことを作品鑑賞カードに書く。 *その友だちへのメッセージという形で書く。	する。 ○作品鑑賞カードを配布し、子どもたちに絵を見て感じたことをできるだけたくさん書かせるようにする。
10分	○作品鑑賞カードをもとに、意見交換会をする。	○韓国の友だち（作者）あてのメッセージ形式で書くようにさせる。
15分	○作者からの手紙を読み、感じたこと考えたことを書く。	※作品を掲示したパネルは子どもたちが自由に見て回れるように配置する。
5分	○授業のまとめをする。	○自分たちが感じたことを自由に発表させる。
		○友だちの感じ方と自分の感じ方との相違を意識させる。
		○ウンナン小学校6年生のミンソプさんの手紙を読む。
		○手紙の内容について感じたこと、考えたことなどを自由に書かせる。
		○子どもたちの学びが他の活動に広がっていくような支援をする。

◇ 子どもたちの感想より

○ キン・ミギョンさんへ

きれいな色を使っているね。とても見やすくて分かりやすくていいと思うよ。日本と韓国の伝統的なものがならべてあって、仲がいいみたいだね。これからも日本と韓国で仲良く助け合って生きていこうね。これから仲良くしようね。

○ イ・ヨンジュさんへ

私は6年生が描いた絵とは思えませんでした。なぜなら、すごく立体的だったからです。木の色づかいがとてもよくて、上の部分は日に当たっているようにぬってあり、すごくアイデアが出ているな、と思いました。石が積み重なっているところもすごく立体的で筆をおいてぬっていきいだし、石の色がすごくよく出ていました。私もいつかあなたみたいな絵を描いてみたいです。絵を送っていただいてありがとうございました。とても勉強になりました。





○ キン・ソングェさんへ

ぼくは、あなたの絵を見て、韓国の公園の風景がよくわかりました。色のぬり方やたて物の表し方がすごくじょうずだと思いました。色のぬり方では、特に木の表し方がすごくじょうずでした。葉の色の濃いところや薄いところをうまく表して、すごくきれいに描いていますね。ぼくもいつかはあんなきれいな絵を描いてみたいです。

○ イ・ヨンジュさんへ

木のぬり方がとてもきれいでした。土のぬり方も、同じではなく、立体的に表されていてすごく上手ですね。色の区別ができていますね。日本にも同じような木がありますよ。

○ キン・ミギョンさんへ

あなたの絵は、とても色づかいがいいと思います。ぼくは、7枚の絵を並べて見ると、あなたの絵が一番上手だと思いました。日本と韓国は遠いようで、一番近い国でもあります。これからも仲良くしていきましょう。

○ キン・ミンゾさんへ

とっても不思議な絵だけど、ずっと見ていたら、日本と韓国とが仲良くなりたと思う気持ちが伝わってくる絵です。色づかいがとてもきれいで、色の組み合わせがとても上手です。こんなすてきな絵を見られてとてもよかったです。



○ キン・ミギョンさんへ

この絵には、1つのものを描くのにもたくさんの色を使っていますね。建物も立体的で、かげもあって本物みたいです。色の重なるところも色を変えていて、アイデアがいっぱいだなあ、と思いました。遠近感もあるし、線もはっきりしてるなど、絵に特徴があつていいです。また、南大門が韓国の代表的な建物であることや、日本との違いもわかってよかったです。私はこんなに絵がじょうずじゃないけど、同じ6年生なんだから、がんばったらこれだけ上手に描けるのかなあと自信がつかまりました。

○ イ・ヨンジュさんへ

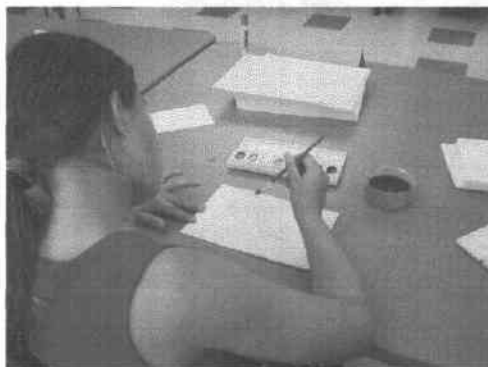
ぼくは、ヨンジュさんの絵が一番気に入りました。ぼくはあまり絵がうまいけど、ヨンジュさんの絵を見たら、アイデアが思い浮かびそうです。ヨンジュさんの絵は、だれが見ても感動すると思います。ヨンジュさんの絵の美しさは韓国の小学生の中でも一番だと思います。韓国には行ったことがないけど、ぜひいつか行ってみたいと思います。これからもいい絵を描き続けてくださいね。



■ アメリカの造形教育を参観して

一昨年、カリフォルニア州の学校を7校訪問し、造形教育を参観する機会があった。その時、特に印象的だったことは、教師がカリキュラム編成から授業づくりに関わっていたことと、子どもたちの表現意欲を高めるようなシステムが重視されていたことである。

そこでは、混色指導や、実際の色を再現することよりも、まずは表現することへの意欲付けを大切にしているようであった。



ある教師が、「子どもたちは知識だけでは生きていけない。子どもたちが元来持っているエネルギーを生かし、伸ばしたい。」と語っていた。子どもたちのもつ力をしっかりと伸ばすことが教師の役目、という姿勢には感銘を受けた。また、評価にあたっては、子どもたちが先天的に持っている才能を評価するのではなく、活動への関心・意欲・態度、作品への取り組み方などを評価することに重点を置いているということであった。

そうした中で、何のために学ぶのか、ということ、子どもたちにも認識させているようなカリキュラムが編成され、このことが、より主体的な学びへと結びついているように感じた。

また、教室や廊下など、校舎中に子どもたちの造形作品が所狭しと展示されている様子も見た。こうした環境のもと、子どもたちは互いの作品を日常的に鑑賞することができ、自然な形で見方・感じ方を広げていくことができると思う。また、自己を認められることにより、表現意欲を高めることができると思う。

異文化理解教育とのクロスカリキュラムで実践している授業もあり、日本の造形教育にもヒントを与えてくれたように思う。

ところで、最近の日本の小学生の絵を見ていると、メディアから受けた影響を再現するような空想画に比べて、実体験に基づく感動の表現や、生活の中から生まれた絵が少なくなってきたように感じる。地域を素材とした作品に取り組む意義を見直したい。子どもたちにとって、時間をかけて身近な地域の対象物と向き合う体験は、日ごろ何気なく見過ごしている地域の素材や地域そのものに、興味をもったり、こだわりをもったりしながら、それらに愛着を持つことにもつながるのではないかと考える。

造形教育を、こうした内と外の目を持って、国際理解教育の視点から見つめなおしたり、国際理解教育の場で実践したりすることにより、それぞれの関わりやとらえ方の広がりが増え、それぞれが少し見えてきたように思う。東洋的なものの見方、東洋的な美意識、印象派の画家たちに大きな影響を与えた東洋人としての「美の感性」をも子どもたちに育てたいと思う。



単元名 「手をつなごう 私たち地球の子ども」(2学期・36時間)

(育てたい子ども像)

- ◎ つながり意識を持ち、他者との関わりを大切に子ども～積極的にコミュニケーションを図る子ども
- ◎ 地球規模で考え、足もとから実行できる子ども

ねらい【課題を見つける力】様々な国の実情から自分なりの課題を見いだす。

【課題を追求する力】具体的な資料を活用したり、様々な人の話を聞いたりしながら課題を追求する。

【表現する力】課題追求の過程や結果を相手意識をもち、工夫して表現する。

【人と関わる力】積極的に他者と関わりながら課題の追求をする。

【生活に生かす力】地球規模で考え、自分たちの身近な生活の中でできることから実行する。

活動の流れ

課題づくり

課題の発見(知る)

- 「世界のことを知ろう」～フォトランゲージ
- 「地球の子どもたちは、今…?」
- 「難民」ワークショップ
- 「100人村ワークショップ」

書画鑑賞

- 自分たちの課題作り・課題解決への見通し

道徳「二頭の馬」

道徳「生命の綱」

図工「アボリジニアート」

世界の子どもたちの生活を調べよう。

追究

追究のための活動

- 働いている子どもの実態を調べる。
 - ・ 学校に行けず、働くなくてはいけない子ども (どんな仕事をしているのだろう・どれくらいいるのだろう)
- 児童労働を体験してみる。
 - ・ 水くみをしてみよう。
- ユニセフやNGOの活動について調べる。
- 日本の生活をふりかえってみる。

韓国の子どもたちとメールで話そう!

社会科「日本にある外国のものの調べ」

道徳「同じ地球の子どもたち」

自分たちの生活と比べてみよう

伝え、広める～知識の共有化

自分たちの調べたことを伝えよう。

～ ポスターセッションを開こう ～

まとめ

生活に生かす

- 自分たちにできることを考え、できることから実行する

☆ わたしにもできる国際協力

書き換じハガキ、使用済みテレホンカード、使用済み切手、衣類を送る、ロータスクーポン、ベルマーク…

募金することだけが援助じゃないんだ!

できることから始めよう!